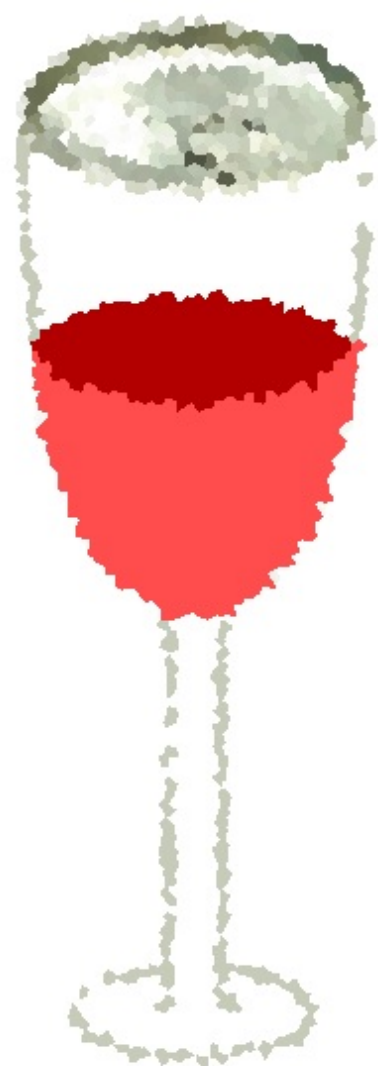




密閉信仰

密 閉 信 仰



話は、学生時代のことから現在の私の職業やプロ野球、好きなテレビ番組など色々と脱線を繰り返しながら、私と彼は酒を酌み交わした。久しぶりに会ったはずなのに、昔からずっと一緒だったような、そんな気がした。

「そろそろ祭りの季節か……あの頃は女の子と行っても、夜店で食ってばかりだったな」

「それはお前だけだろう。ばくばく食いやがって」

「そうだったか」

私は心地よい酔いに任せ、淡い思い出に浸る。確かに彼は全然食べてなかった気がする。次々と食べ物に手を出す私を、いつも彼と彼女が呆れて見ていた。

彼はグラスに酒を注ぎながら言う。

「俺は、ああいう食べ物が嫌いだったからよく覚えてるよ」

「そうか？ 雰囲気でも美味しく感じるだろ」

「いや、味の問題じゃない。夜店の食べ物とかさ、その場で作って、しばらく置きっぱなしだったりするだろ。そういうのが気になるんだ。なんていうか、衛生的に問題がある」

「そうかな」

そんなに潔癖な男だったか彼は。

私の戸惑いに気づいたのか、ごまかすように彼は苦笑を浮かべる。

「最近、そういうのがひどくなってきた気がする。スーパーの野菜とかも気になるんだ」

「大人になったってことかな」

私は、見当違いな返答をしつつ、彼は確かにやつれたなと、別のことをぼんやりとした頭で思った。

そして、そんな風に彼を見ることに罪悪感めいたものを感じ、室内に目を向けた。

彼のコレクション・ルームだというこの部屋はとても変わっていた。彼の後ろの棚には、大小様々な缶詰が並べられ、私と彼の座る椅子や、グラスのおかれたローテーブルまで大きな缶詰の形をしていた。

「おお、あれは空気の缶詰か？ 懐かしいな」

私は場の空気を変えるように立ち上がり、棚の缶詰に目をやった。

「ああ、結構たまったな。どっか行ったときは必ず作るから」

「え、自分で作るのか」

「ああ、実は缶詰が趣味なんだ」

「初めて聞いたな。しかし、空気の缶詰ねえ」

「あれは結構いいものだよ。甲子園の土みたいなものでさ。そのとき、そこにしかない何かってあるだろ。それを切り取って保存したいという欲求を人間は持っている。文字や絵画、写真やビデオ、保存方法は様々だ。そして、缶詰はモノ自体を保存する。もちろん保存しても開けなければ視聴覚では認識できないがな。けれど、結局、そこにあるというだけで人は満足できるもんな

んだよ」

「本当に入っているのか、と俺なら疑うけど」

「それを信じられるかどうか。お前じゃ無理かもな」

私と彼は少し笑った。酔っていた事もあって、私は気が緩んでいたのだ。

「奥さんは元気か？」

言ってしまうってから後悔した。だが、彼は平然とした様子で答えた。

「ああ、元気にしているよ」

私は彼の顔を見る。彼も私の顔を見ている。

「そうか……。半年前になるかな？ 前に会ったのは」

「半年？ それはないな。少なくとも一年は前だ」

私は内心、ドキリとしたが、なるべく動揺を抑える。

しかし、酔っていて表情を制御できている自信はなく「ああ、そうかな」と答えるのが精一杯だった。

確かに彼女と最後に会ったのは一年前だ。彼と会ったのは数年振りだというのに。だが、私と彼女はもう終わっている。

「シュレディンガーの猫を知ってるか？」

「え、ああ」

彼の突然の話題転換に私はついていけない。

「何だっけ？」

彼は少し苦笑して、

「実は俺もわかってない。そして原理は、話にはあまり関係がない」

「ないのかよ」

私は再び缶の椅子に座る。

「箱を開けるまで猫が生きているか死んでいるかは五十%の確率で重なりあっている。そして箱を開けて観測した時点で生死が決定する。そこには時間も何も関係なく。俺はこれを希望の話だと受け取った」

次第に、彼の目は遠くを見つめるようになっていった。私を越えて、遠く。

「可能性を密閉するんだ。希望はそうやって生まれる。どちらかわからないなら、俺は良い方の可能性を信じて、選ぶよ。この缶詰には 南アルプスの空気が入っている。そう信じれば幸福になれるじゃないか。多分、人間はそうやって、ここまで発展してきたんだと思う」

彼の言葉は静かだったが、力があつた。しかし、それはまるで、

「密閉したものは、誰にも干渉されない。干渉されなければ、変化しない。残された希望は希望のまま保存される。俺は……俺は、それでいい」

そう言って彼は、両手をついて、愛おしそうにテーブルを、巨大な棺桶のような缶詰を撫でる。

私は恐ろしい想像に、全身が冷たくなるのを感じた。

私は震える声で、ようやく声を出した。

「奥さんは……彼女は、どこにいるんだ」

彼は動かしていた手を止めた。そして、広げていた手の人差し指で、一度、とんとテーブルを叩いた。

私の心臓が早鐘のように鳴る。

彼の目がどこに向かっているか、今わかった。彼の目は、どこかの希望を見つめている。

彼が静かに言った。

「彼女は俺を愛している。俺はそう、信じている」

彼はテーブル上に手を置いたまま、視線をゆっくりと私に向けた。

そして、どこかの希望を見つめる、冷たい目で、私に向かって言った。

「お前は、どちらを信じる？」



死が二人を
分かつたない

「汝、この者を妻とし、健やかなる時も、病める時も、幾度、輪廻を繰り返したあとも、未来永劫、この宇宙が終わるまで、愛し続けることを誓いますか？」

「……いいえ」

「ちょっと！」

「いや、やっぱり、無理だわ。これ」

「何でよ！　いつまでも愛してるっていったじゃない」

「言ったけどさ……言ったけど、お前考えてみろよ。今は良いよ。でも俺たちが死んで、天国？　転生？　とか知らないけど、死んだ後なんてわかんないじゃん。もし、転生するとして、それに時間差があつてさ、俺が50過ぎてて、お前が8歳くらいだったら、そこに愛があったとしても犯罪になるんだよ」

「あなたが、60過ぎまで待てばいいだけでしょ」

「いやいや、お前はそれでいいのかよって話になるけど。まあ、いいよ。それはまだ人間だから。じゃあさ、俺がハエで、お前がカエルだったら？　食べるだろ、お前。絶対俺を食べるだろ」

「誰がカエルよ！」

「例えだよバカ」

「もしも、私がカエルであんたがハエでも、私を愛してるなら、喜んで食べられなさいよ。私の血肉となりなさいよ」

「イヤだよ！　何で俺の一生分の愛が、お前の一食分のカロリーになるんだよ」

「だって、カマキリはメスがオスを食べるじゃない」

「だから、そういうのが、無理なんだって」

「何よ……いつまでも愛してるって言ったのに……」

「だから、生きてるうちは愛するよ。今生をお前に捧げても良いよ。今は来世の話をしてるんだろ。バカ！」

「何よ。バカバカって！　バカはあんたでしょ。誓うくらいできるでしょ。あんた、誓いを破ったら死ぬような真面目な人間だったっけ！？」

新婦の剣幕に押されながら、新郎は小さな声で言った。

「……俺にはこれが、誓いというより、呪いに聞こえるんだよ……」



急に夫が冷たくなりました

夫は私に冷たくなりました。

何度話しかけても、答えは返ってきません。まるで、私に興味を失ってしまったかのよう。

あの日からずっと、夫は布団に入ったお風呂にも入っていないので少し臭い。

夫は病気なんだと私は自分に言い聞かせ、それで、少しだけ妻の私は納得します。でも、女の私は納得できないのです。

毎朝、私は夫に声をかけます。愛していると言って、身体に触れます。それでも夫は私に何の反応も返しません。

急に夫が冷たくなりました

夫は私に冷たくなりました。

何度話しかけても、答えは返ってきません。まるで、私に興味を失ってしまったかのように。あの日からずっと、夫は布団に入ったままです。お風呂にも入っていないので少し臭います。夫は病気なんだと私は自分に言い聞かせます。

それで、少しだけ妻の私は納得します。でも、女の私は納得できないのです。毎朝、私は夫に声をかけます。愛していると言って、身体に触れます。それでも夫は私に何の反応も返しません。

夫は、娘とだけ外出します。それも私の目を盗んで、私が知らない間に。

朝早く、私は布団の中に夫が居ないことに気付くと、直ぐに外に飛び出して二人を探します。小学4年生になる娘を、夫はとても可愛がっています。私だって娘を愛しています。それに私は娘を愛する夫も愛しているのです。

外を出てすぐの、いつもの小道を二人はゆっくり歩いています。夫は娘に寄りかかるようにして、娘はそれでとても歩きにくそうです。他人からみれば仲睦まじい愛すべき親子の姿に、私は何故かとても悲しくなります。

悲しくなった私は二人に追いつくと、何も言わずに夫の手をとります。冷たい夫の手。夫は、涙を浮かべる私を見ても、何の反応も返しません。代わりに娘が哀しそうな顔で私を見ます。私は、大丈夫よ、と言って夫の手をとり、抱きかかえるようにして家に引き返します。パパは病気なだけだから。

思い返すだけで涙が出ます。だんだん痩せていく夫。それでも、その背中は何も語ってくれません。

いつまでこんなことが続くのでしょうか？

あなた、許してください、お願いします。そう言って、私は、泣きながら夫の背中にすがりつきます。体温を奪われる私の身体、とても冷たい。

あの日から時間は止まったままで、私はできるなら停止する前に戻りたい。

あのとき、夫から、別れたい、という言葉がでたとき、私は心臓がとまりそうになりました。夫の愛が私を動かしているとさえ思っていたから。彼が、家に帰ってこなくても、例え誰かの家にいるのだとしても、私と彼の間には愛があると信じていたのに。

夫に謝りたいのです。私が彼の携帯電話を見たことや、彼の浮気相手に黙って会いにいったことも、彼を何度も何度も、刺してしまったことを。でも、でも、私にはそれ以外、あなたの中に届くものがなかったから。

ごめんなさい。謝ります。ですから、お願い。もう一度だけ、笑って。

九九殺人事件の解決



九九連続殺人事件の解決

探偵は、警部を前にして断言した。

「犯人が、分かりました」

「ほ、本当かね……！」

「はい。おそらく、これで事件は解決します」

言葉とは裏腹に、探偵は暗い顔でうなずいた。

探偵は、広間に関係者を集める。

「70人もの人間が死んだこの連続殺人事件。それを繋げる糸が、やっとわかりました」
ざわめく広間。

「早く言いたまえ」

警部は探偵を促した。

探偵は、真っ直ぐに広間の人間を見つめて言った。

「それは、九九です」

「九九……！？」

探偵は、用意されたホワイトボードに、数式を書いていく。 1×1 、 1×2 、 1×3 ……。

「殷一が胃血、殷二が煮、殷三が酸……、二人が死、兄さんがロック……、全てを言う必要はないでしょう。連続殺人における被害者の状況、これらは全て九九の見立てなのです。そして、この九九の謎を解いたとき、犯人がわかりました」

警部は手帳をめくりながら、呟く。

「殷一さんは、毒で血を吐いて死に、殷二さんは、風呂で煮られて死んだ。殷三さんは、青酸カリで……まさか、そんな」

「その、まさかなのです。私は9人目の被害者がインクを丸呑みして死んでいた所で仕組みに気付いた。しかし、まだ犯人を特定するには至らなかった。そして、70人もの被害者を出して、やっと、犯人にたどり着いたのです」

探偵は、一旦言葉を切ると、死者に黙祷をささげるかのようにしばらく目を瞑った。そして、目を開くと、説明を再開した。

「70番目の被害者の死因は、体中を蜂に刺されてのアナフィラキシーショック。この被害者は、連続殺人事件に巻き込まれた結果、商売に失敗、財産と家族を失い、恋人に別れを告げられた。そして被害者の大嫌いだった虫に囲まれて死ぬという四重苦を味わっているのです。つまり、ここで『蜂死致、四重苦』の見立てが行なわれていたのです。そして、ここに犯人の失敗があった」

「ん……？ ふむ。そうか……、おかしいぞ」

「そう。 8×7 は49ではない。56です。犯人は九九を間違えている。 7×8 、『死地は誤銃ロック』では間違ってたのに。つまり、犯人は」

警部がわかった、とばかりに手を叩いた。

「8の段が苦手……」

探偵は警部の方をむいてうなづく。その顔は少しだけ苦しそうに見えた。

「そうです。そしておそらく、それだけではない。犯人は、まだ8の段を習っていない」

「な、なんだって……！」

「つまり、犯人は」

探偵は、ゆっくりと右手をあげ、一人の人間を指差す。

「この中で最年少……小学2年になったばかりの亜由美ちゃん、あなたですね」

広間は静まり返る。そして、ぱちぱち、と小さな拍手が起こった。

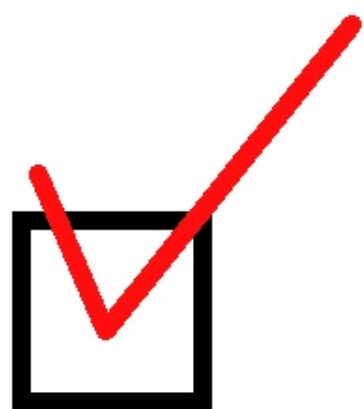
「……その通りよ。探偵さん」

驚愕し、動けない大人たちの中、広間には、しばらく可愛い拍手の音が響き続けた。

そのとき、亜由美ちゃん（7さい）は、探偵にこう語った。

「九九がどうしても覚えられなくて……どうしたら覚えられるか必死に考えたわ。そして、何か印象的な事と一緒に覚えればいいということに気付いたの。そうしたら九九を覚えることよりも夢中になっちゃって。予習のつもりで八の段に手をだしたのね。でも、間違って覚えてたら、しょうがないな。ははは。あーあ、最後の9×9で、先生を殺してやろうと思ってたのに」

この事件の後、急速に「ゆとり教育」が推し進められる事となる。



確認

確認

まず最初に確認しておこう。僕の名前は十倉克彦。どこにでもいる普通の男子高校生。成績は中の上。運動も中の上。サッカー部に所属。サッカーは愛しているが下手。血液型はB型で、星座は射手座。好きなタイプの女の子は……っていかんいかん、何事も真剣にやりすぎるのが僕の癖だ。プロフィールはこのくらいでいいだろう。

そんな普通の僕だけど、最近困った事件に出くわした。同じクラスの皆森千里がストーカー被害にあったのだ。皆森千里は可愛い女の子だけど、目が見えない。その恐怖はいかばかりだったろうか。僕にはわからない。

でも第三者であるこの十倉克彦が関わる事で、ストーカーは行動を焦り、映画でいうクライマックスのような事件を起こして、警察に捕まった。

そして全部終わって一週間。今、僕は皆森千里の家を訪ねている。

インターホンを押すと、彼女の可愛い声が返ってくる。

「誰？」

声を聞くだけで僕は思わず微笑んでしまう。僕だよ。

「十倉だよ」

「十倉、君？」

心細い、不安げな声が返ってくる。何でだろうと、少し考えて、自分の声の低さに気付いた。

「風邪引いちゃって。咽喉の調子が悪いんだ。ほら先週、あいつと池に落ちただろ」

トットトットと歩いてくる音がして、扉が少し開いた。まだ少し不安そうな皆森千里の顔がのぞいた。

「大丈夫？」

声から、彼女の不安が、扉の前に立つ人間に対する不信からではなく、僕の体の心配によるものだと気付く。チクリと胸が痛む。

僕は笑って言う。

「入っていい？」

彼女はコクリとうなずいて、チェーンをはずした。

「今、お母さんいないの」

実はそのことは知っていた。それなら簡単にチェーン外したら駄目だろうに。僕は少し驚いた。

十倉克彦という人間がよほど信頼されているということか。少し複雑な気分だ。そんな事を考えながら靴を脱ごうとしたら、マヌケなことにバランスを崩した。

「おっと」

声に気付いた彼女が振り向き、手を伸ばした。思わずその手につかまる。

手が触れ合って、僕らの時間は一瞬止まる。

僕の気持ちは膨れ上がる。

「あの日からずっと言えないでいたんだけど」

直ぐに彼女は手をひっこめた。その仕草がとても可愛くて、僕は次の言葉を継ぐまでに時間が空いた。

そして僕より先に彼女が口を開いた。

「あなた、誰？」

「十倉君の手と違う」

これは想定外だ。

手か。少し触れただけでわかる程、あいつの手を覚えてたのか。

用心深い君が、名前を言っただけで扉を開けてしまう。あいつは、君の中のとても深いところにいるんだね。

僕は心がまた闇に沈みそうになるのを振り払う。でも、もう関係ないのだ。迷う必要は無い。十倉克彦はもういないんだから。

僕は微笑む。言葉を紡ぐ。

「確認しよう。僕は君を愛してる……君は？」

僕の言葉に彼女の身体がびくりと震える。

その仕草がとてもとても可愛くて、僕は。

あなたは
つけてあげない



あなたはつけてあげない

君は、ぬかみそが好きだったね。いつも君は台所に屈みこんで、黒く長い髪を邪魔そうにかき上げながら、嬉しそうに、キュウリや茄子を漬けていた。

家中が臭かったよ。でも僕は君を愛していた。

いつの間にか、台所も、リビングも、寝室も、客間も、僕の書斎さえも、家中の部屋の床下には、ぬか床があった。それを僕が知った時、君はいたずらっ子のように舌を出したね。それだけで僕は最高にハッピーになった。

いつだったか、浴槽にぬかみそを満たして、そこに入ってたことがあったね。ぬかみそ入浴健康法なんて、出鱈目な名前をつけて。

あのときは驚いた。だって、帰ってきたら君が脱水症状を起こして倒れているんだもの。体の水分がほとんど抜けるまで、ぬかみそに浸かっていた君の、ぬかみそへの愛には嫉妬すら覚える。

それでも、ぬかみそを混ぜている君は、子供のように邪気のない笑顔で、それでいて美しかった。その華奢な体には信じられない程のぬかみそに対するエネルギーが詰まって、それが眩しかったんだと思う。僕はそんな君をよく後ろから抱きしめたね。君は驚いて、でも笑いながら僕の顔にぬかみそを塗りたくった。僕は、それが君の最高の愛の表現だとわかっていた。君を愛していたから。

君は言ったね。

「貴方は漬けてあげない」

「どうして？」

「私を漬ける人がいなくなるから」

君の最後の頼み、僕は喜んで引き受けたよ。君が笑うのがとても好きだったから。でも、哀しかったよ。とても、とても。とても、とても、とても。

君のいない長い夏が終わって、やっと秋になった。君に会える。

僕はキュウリが嫌いだったけど、君の漬けたキュウリは好きだったよ。だから、もし

かして、君の事をもっと愛せるようになっているのかもしれない。

ああ、見つけたよ。お帰り。

「ただいま、あなた」

A B C D E F

G H I J K L

M N 君の憂鬱

O P Q R S T

U V W X Y Z

N君は思い悩んでいた。ただしN君は、自分が何について悩んでいるのかわかっていなかった。そのよくわからないN君の悩みは、N君の中に漠然とした不安を生み、所在不明な焦燥感を植え付けた。それは日々大きくなっていくが、N君はどうすることもできずに、ただ悩んでいるのだった。

N君と去年の春に結婚したMさんは、N君を心配した。

「仕事がうまくいってないの？」

「いや、順調だよ。今度、新しいプロジェクトを任せられることになったし、すごく、やりがいもある」

「お金のこと？」

「今の会社は給料もいいし、独身時代の貯金もあるからそれは心配してない」

「私の両親のこと？」

「君の両親とは結婚前はいろいろあったね……でも、もう何のわだかまりもないし、ぶつかったおかげでいろいろわかったこともあったと思う。それに、君のご両親はとてもよい人達だよ」

「……子供のこと？」

そう言って、Mさんは自分のお腹をなでた。Mさんは妊娠十ヶ月。予定日はもうすぐだった。

N君はMさんの目を見て、嘘偽りなき気持ちで答えた。

「それは違う。僕達の子供が生まれることは、僕の喜びであり、僕の幸せなんだ」

しかしN君の悩みは晴れない。N君の周囲の人々はN君を思いやり励ました。

N君の祖父Aはまだ存命で、祖母のBと共にN君の家に遊びにきては、少ない年金から美味しい食材や子供服などを買ってくれる。N君とMさんを引き合わせた二人の共通の友人Cさんとその夫D氏は、二人を招いてホームパーティを開いた。そこで、N君は友人Eくん、Fくん、Gさんと楽しい時間を過ごした。N君の上司であるいつも寡黙なH部長は、珍しくN君を飲みに誘い、酔いつぶれながら、N君を頼りにしていることを明かした。Mさんの姉で、ガンジスの呼び声を聞いたと言って仕事を辞めインドを旅行中のIさんから数年ぶりに手紙が届いた。「バカ殿録画しといて」。N君が初恋の相手である双子の姪のJちゃんとKちゃんが恋の相談をしにやってきて、N君とMさんは大いに二人を焚きつけた。N君の古くからの友人のLは外国から珍しいお菓子をたくさんくれた。繁華街で出会った占い師Oは、N君の運勢は三国志で言うところの赤壁の戦いだと言った。N君の行きつけの喫茶店のマスターP氏は、N君とMさんに新作コーヒーをふるまい小粋なジョークで和ませてくれた。N君の弟のQ君は珍しく、N君の大好きな歌手Rのライブチケットをただでくれた。N君の住む街を騒がした変態魔術師Sが、Mさんの活躍により逮捕され、Mさんは元彼Tの仇をやっと討つことができた。歌手Uと俳優Vがスピード離婚した。N君が通勤途中にふとしたことで出会い仲良くなった老夫婦WさんとXさんの家に招かれ、行方不明の息子の話を聞いたところで、近所の公園に住むようになり顔見知りになったホームレスのY氏を思いだし、引き合わせてみればやっぱり本人で、抱き合う親子を見て、N君は涙ぐむのだった。

全てはうまく進んでいた。そして、Mさんが出産の為に入院していた病院から連絡があり、N君は仕事を途中で切り上げて、病院に向かった。Mさんは既に分娩室に入っていた。かかりつけの産婦人科医Z氏は、持病を持つMさんの出産には危険が伴うとN君に告げた。N君はそれを事前に聞いて覚悟していたので、静かにうなずいた。

N君にとって長い夜がはじまり、そして明けた。

夜明け頃、分娩室の外で、ただひたすら祈っていたN君の耳に、赤ん坊の鳴き声が届く。N君の体の奥底からこみ上げる喜びとともに、唐突にN君の悩みが言語化した。

「アルファベットが足りない」

分娩室で、生まれたての赤ん坊を抱いたとき、N君の心は決まった。N君がMさんを見やると、Mさんは憔悴しながらも決意をたたえた目でN君を見ていた。夫婦の間に無言の意思確認が行われる。この子の為にできること。足りなければ、減らせばいい。

産婦人科医Z氏は、泣いて喜ぶ夫婦の姿に目を細めながら、本能で異様な雰囲気を感じ取って、知らず一歩後ずさった。早ければ早い方がいい。Z氏を見る二人の目がそう言っているように見えた。



僕は
ワトソンに
あこがれる

僕はワトソンにあこがれる

私の心臓は低く重い音を断続的に体中に轟かせていて、それにあわせて私の小さな胸は大きく跳ね上がっている。既に京子先輩は壇上に上がりマイクを手に行っている。先輩の理知的で冷たい視線が、哀れな子羊である怯えて混乱する学生達を見渡している。ああ、カッコいいナァ、京子先輩……。

そして、先輩の冷たい静かな声がホールに響いた。

「犯人はこの中に居ます」

言った！ 宣言！ 全校生徒の前での謎解きが始まる！

今や私の心臓は16mm機関銃のように血液を撃ち出している。頬が紅潮していくのがわかる。

京子先輩のワトソン役たる私としたことがはずかしい！ 堂々としなさい、友梨！

先輩の声はそんなに大きくなかったのに、騒ぎ出していた生徒たちは喋るのを止め、一世に壇上の先輩を見た。これが先輩の力。名探偵としてのカリスマ性。私は、そんな先輩が、先輩のことが。

「犯人は貴方です。三村清二さん」

いきなり先輩が犯人を指差す。先輩の細く白い指の先には、分厚いメガネをかけた唇の厚いオタクの三村清二の姿があった。三村は何を言われたのかわからずきょんとしている。

気付けよッ！ お前だよ！ 反応しろバカ三村！

周囲の人間が先に気付き、ざわめきながら三村から距離を取り始めた。それでやっと気付いた三村は、ずり落ちたメガネを中指で抑え、どもりながら叫んだ。

「な、何で僕が」

「説明しましょう」

背中をゾクゾクが駆け巡る。先輩から、三村に向かって、どうして犯人が三村であるのかの説明が行われている。淡々としながら、まるで見ていたかのように、三村の犯行を説明する。そのときの先輩には、演説者の昂りも、弾劾者の怒りもない。黒板の前で数学の証明問題を説明するように、三村の犯罪について述べている。

私は、それをうっとりと見つめる。子宮が締め付けられるような錯覚を覚える。私は、やはり、この人の側にしかいられない。

そして先輩の説明は、想像通り、私の想像を越える。

「そして、もう1人の犯人、三村清二さんに犯行を行なわせた人物がいます。それは」

それは、それは、それは、それは。誰ですか。京子さん。

私は、息を吸うことも忘れ、先輩の言葉を待った。やはり、やっぱり、やっぱり、やっぱり、先輩は。

「妃友梨さん。貴女ですね」

先輩は、最高だ！ 私はこのまま倒れ込みたい欲求を必死でこらえる。

先輩の白い指先は、壇上の隅っこにいる私の方に向いている。

そう、そう、そう、そう、そう、そうなんです！ 私が真犯人なんです！

「そして、本当の名前は、指名手配中の殺人鬼・木崎友二。信じがたいことに、その姿は女装…

...でなくて整形手術」

そう！　そうです。そのとおりです。京子さん。やはり、貴女はそうでなくてはならない。

本物の引きこもりで根暗の妃悠里はもうこの世にはいない。僕が殺した。僕は木崎友二です。あなたの側にいたくて、また犯罪を犯してしまいました。。

「京子さん！」

僕はたまらずに大声を上げてしまった。とてもはずかしい。僕は憎むべき犯人でさえまともに務まらない。

壇上の京子さんは相変わらず感情を見せない目で僕を見ている。今日は少し憂いを帯びたように見えるのは、陽が沈んで、ホールが暗くなったからだろうか。

ああ、とにかくまた失敗だ。今度こそ京子さんのワトソンになれると思ったのに。でも次の事件は考えてある。名探偵と探偵助手の出会いとなる最初の事件は。

悲しいけど嬉しい。わかっている。僕は、僕の存在はまるっきり矛盾している。僕は僕が京子さんのワトソン的な位置に立つための事件を構築しながら、その事件が外側だけでなく内側の僕がむき出しになって台無しになるまで解体されることを喜んでいるんだ。

京子さん、同じ孤独な天才でありながら、僕と貴女の位置は点対称。常に決定的に異なってしまう。それでも僕は、貴女の隣に居たい。だから、僕は。

彼について



彼について

「まず彼の性的嗜好について。彼は低年齢の女子、つまり幼女にしか興味を持ちません。成人女性のポルノグラビア、ビデオ、それらの類が彼の興味をひく事はありません。実際、彼は裸同然の私を見ても、顔色一つ変えなかった。そして彼は今、特定の幼い女子に対して興味を抱いています。彼女を遠くからずっと眺めていたり、時に近づいて悪戯に及ぶこともあります。これまでも彼の毒牙にかかった女子はたくさんいます。しかし私達は彼女達の涙を拭いて慰めることしかできないのです。

次に彼の持つ残虐性について。彼は自分より小さい生き物を虐める事にこの上ない喜びを覚えるようです。小さな箱に生き物を閉じ込めて死ぬまでうっとりと眺めたり、大量の生き物を水で溺れさせようとしたり、直接、手で握りつぶそうとしたり、行為は日課のように続けられています。私は一度、彼が踏みつけて生き物を殺そうとしたのをたしなめた事があります。すると彼はきょんとんとして、その愛らしい顔を私に向け、笑ったのです。私は生まれて初めて、笑顔が恐ろしいと思いました。

最後は彼の特異な独占欲について。彼は、時折、自分で制御できないほど感情を爆発させることがあります。それは『自分のもの』が誰かにとられそうになったときです。彼は、『彼のもの（ほとんどの場合、彼の勝手な思い込みで決められる）』を誰かが勝手に触ったり、持っていこうとしたとき、突如泣き喚き、暴力を振るうのです。そうなった彼には、彼が持っていたわずかな社会性すらも消えています。私は彼を止めようとして何度も傷を負いました。その傷を見るたび、私は確信するのです。

彼の異常な『独占欲』がやがて、いたいけな『幼女』へと及び、おぞましい『残虐性』を発揮することを。

私は彼が恐ろしいのです。凶悪な犯罪者の資質を持つ彼と日中一緒に過ごすことなど、もはや、できないのです」

「先生……それは幼稚園児としては普通なのでは……」

「普通！ 普通って何だ！ これだからゆとりはッ！」

「先生」

「戦争を知らない子供たちは帰れ！ 休み欲しいっ！ 子供なんて嫌いだっ！」

「先生、落ち着いてっ……！」

「若い奴嫌いっ！ 平成生まれは死ねっ！ 結婚したいっ！」

「先生……！」

a b c d e f

g h i j k l

m n 君の憂鬱

o p q r s t

u v w x y z

n 君は思い悩んでいた。ただし n 君は、自分が何について悩んでいるのかわかっていなかった。そのよくわからない n 君の悩みは、n 君の中に漠然とした不安を生み、所在不明な焦燥感を植え付けた。それは日々大きくなっていくが、n 君はどうすることもできずに、ただ悩んでいるのだった。

n 君と去年の春に結婚した m さんは、n 君を心配した。

「仕事がうまくいってないの？」

「いや、順調だよ。今度、新しいプロジェクトを任せられることになったし、すごく、やりがいもある」

「お金のこと？」

「今の会社は給料もいいし、独身時代の貯金もあるからそれは心配してない」

「私の両親のこと？」

「君の両親とは結婚前はいろいろあったね……でも、もう何のわだかまりもないし、ぶつかったおかげでいろいろわかったこともあったと思う。それに、君のご両親はとてもよい人達だよ」

「……子供のこと？」

そう言って、m さんは自分のお腹をなでた。m さんは妊娠十ヶ月。予定日はもうすぐだった。

n 君は m さんの目を見て、嘘偽りなき気持ちで答えた。

「それは違う。僕達の子供が生まれることは、僕の喜びであり、僕の幸せなんだ」

しかし n 君の悩みは晴れない。n 君の周囲の人々は n 君を思いやり励ました。

n 君の祖父 a はまだ存命で、祖母の b と共に n 君の家に遊びにきては、少ない年金から美味しい食材や子供服などを買ってくれる。n 君と m さんを引き合わせた二人の共通の友人 c さんとその夫 d 氏（水虫）は、二人を招いてホームパーティを開いた。そこで、n 君は友人 e くん、f くん、g さんらと楽しい時間を過ごした。ついでに f 君は g さんに告白した。n 君の上司であるいつも寡黙な h 部長は、珍しく n 君を飲み회에誘い、酔いつぶれながら、n 君を頼りにしていることを明かした。m さんの姉で、ガンジスの呼び声を聞いたと言って仕事を辞めインドを旅行中の i さんから数年ぶりに手紙が届いた。「ドリフ録画しといて」。n 君が初恋の相手である双子の姪の j ちゃんと k ちゃんが恋の相談をしにやってきて、n 君と m さんは大いに二人を焚きつけた。n 君の古くからの友人の l は外国から珍しいお菓子をたくさんくれた。繁華街で出会った占い師 o は、n 君の運勢は一年戦争で言うところのソロモン攻略戦だと告げた。n 君の行きつけの喫茶店のマスター p 氏は、n 君と m さんに新作コーヒーをふるまい小粋なジョークで和ませてくれたがいつも通り面白くなかった。n 君の弟の q 君は珍しく、n 君の大好きな歌手 r のライブチケットをただでくれたが歌手 r は覚醒剤所持で逮捕された。n 君の住む街を騒がした変態魔術師 s が、m さんの活躍により逮捕され、m さんは元彼 t の仇をやっと討つことができたが、それは序章でしかなかった。歌手 u と俳優 v がスピード離婚したがまた復縁した。n 君が通勤途中にふとしたことで出会い仲良くなった老夫婦 w さんと x さんの家に招かれ、行方不明の息子の話を聞

いたところで、近所の公園に住むようになり顔見知りになったホームレスのy氏のことを思いだし、引き合わせてみれば本人ではなかったが、y氏の連れていた犬こそが老夫婦の探していた息子だった。抱き合う夫婦と犬と、その隣にたたずむy氏を見て、n君は涙ぐむのだった。

全ては、大体においてうまく進んでいた。そして、mさんが出産の為に入院していた病院から連絡があった。n君は仕事を途中で切り上げて、病院に向かった。mさんは既に分娩室に入っていた。かかりつけの産婦人科医z氏は、持病を持つmさんの出産には危険が伴うとn君に告げた。n君はそれを事前に聞いて覚悟していたので、静かにうなずいた。

n君にとって長い夜がはじまり、そして明けた。

夜明け頃、分娩室の外で、ただひたすら祈っていたn君の耳に、赤ん坊の鳴き声が届く。n君の体の奥底からこみ上げる喜びとともに、唐突にn君の悩みが言語化した。

「アルファベットが足りない」

分娩室で、生まれたての赤ん坊を抱いたとき、n君の心は決まった。n君がmさんを見やると、mさんは憔悴しながらも決意をたたえた目でn君を見ていた。夫婦の間に無言の意思確認が行われる。この子の為にできること。足りなければ……。

ベッドの上、生まれた子供を抱きながら、mさんは言った。

「ねえ、教えてくれる？」

ベッドの脇の椅子に座り、妻と子供を愛おしそうに見つめていたn君は、少し照れくさそうにして言った。

「尊敬するじいちゃんのa、ぼくらを引き合わせるきっかけをつくった優しいdさんのd、最後に君のm。これを合わせて、a d a mってどうかな」

「あら、お祖父さんの字が二つ入ってるわ」

「二つくらい入れとけば文句ないだろ」

二人は笑った。

笑いながら、少し涙をにじませて、mさんが言った。

「いいと思うわ」

この日、ひとりの生命が新たに祝福を受けて生まれ、そして新たに「名前」という概念が生まれた。